

「かわいい」や「気配」という、  
領界があいまいで流動している空間。  
そこには機械論的に単純化されない、  
未分化の状態の直覚的な空間観応能力をもった  
イメージの源泉がある。

磯崎新『都市デザインの方法』

# Marginal Japan

日本は周縁から立ち上がる。新しい価値や希望は中央からでなく、マージナルなところからやってくる。現在では伝統文化といわれるもののほとんどが、名もなき職人や河原者から生まれたように、はぐれたり、はみ出したり、逸れたりすることこそが、日本のクリエイティビティをつき動かしてきた。日本の美意識を知るには、キワを見るといい。キワにはたいてい、マレビトが出入りする。

Japan Concept 1  
**kiwa** キワ

Japan Concept 2  
**marebito** マレビト



①

©タナカカツキ/KITAN CLUB



②

①2013年頃大流行した「コップのフチ子」は、日本人のキワ（フチ）で遊ぶ感覚が結晶したフィギュア。②日本のネイルアートのレベルは世界一ともいわれる。③女子高生は校則のキワでおしゃれする。ルーズソックスもそのあらわれだった。④⑤畳の縁や着物の半襟で、個性を競い楽しんできた。

# 襟元 指先 足元、 勝負はキワで。

よく見れば なずな花咲く 垣根かな

松尾芭蕉



③

提供：制服通販リサ アンド ザ スターライト



④



⑤

提供：ふりふ <http://furifu.com/>

「キワ」は内と外をつなぎながら  
そこに臨める目印となるところ。  
キワに赴くことが「極める」となる。

## ウチ・ソトを分断しない、日本のフレーム感覚

日本は「キワ」を大事にする。キワは「際」、たんなるヘリやフチではなく、そのキワが立つこと、つまり際立つことが、日本のデザイン感覚の第一歩にあたっていた。縄文土器はとくにキワを強調したし、十二単の襲（かさね）も、畳や襖や屏風の縁も半襟も、「キワ」にこそ意匠の極みが宿ってきた。

こうした日本のフレーム感覚が西洋の額縁と違っているのは、内側と外側を分断せずにつないでいることだ。このことは、生垣や軒や縁側といった日本の家屋の構造にも通じる。家から世間にせり出すちょっとした空間のキワが、日本人のコミュニティ感覚もつくってきた。枕草子なら「春はあけぼの」として「やうやう白くなりゆく山際」を愛でたように、瀬戸際、去り際、別れ際、移りゆく時間の中のキワにも、日本人の美意識があらわれてきた。

## 多神多仏のアナロジー

日常を見廻してみると、キワにまつわるシソーラスがふんだんにあることに気がつく。極める、際どい、極み、キワモノ、きわきわ、瀬戸際、間際、生え際、波打ち際、窓際、スミ、カド、ヘリ、フチ、ハシ、キレ、カギリ、隅っこ、部分、間……。なぜ日本はこんなにも端っこが好きなのか。八百万の神々とともにあった日本では、厳密な論理の整合性を継承するよりも、言葉やイメージの律動や意味の共鳴こそを継いできた。連歌や茶の湯といった座の文化も、こうしたアナログカルな連想力や共創力に支えられて出来上がったものだ。事象や現象の似たイメージを重ねて、そこに立ち会う者の心の機微をとらえる。このときに、ハシやフチやキワが動き出す。相接するものをつなぐインターフェイスとしての「キワ」から、数々の日本が立ち上がっていったのだ。

そのキワ感覚は、繊細なネイルアートにも、相槌を引き受けるLINEのスタンプにも、コンビニおにぎりの包装の工夫にもあらわれている。



縁側

縁側は内と外を仕切りながら、つなげる。誰でも出入りできる、近所の人との交流の場でもある。



草履の花緒

足のキワを彩る花緒は、着物コーディネートネットの詰め部分。写真は「祇園ない藤」の草履。



LINEスタンプ

「了解!」「ありがとう」。喜んでるのか怒ってるのかツッコんでるのかボケてるのか。それが意味するところは、互いの間合いのみぞ知る。超文脈的にコミュニケーションのキワを引き取る。



つけまつげ

100円ショップにズラリと並ぶ種類豊富なつけまつげ。その微妙な差異が、キワのおしゃれの醍醐味なのだ。



日本の風土性は、間隙と間、空無と沈黙を尊重して、  
ヨーロッパの風土性よりも場所的な次元を相対的に重視する。  
—オギュスタン・ベルク『風土の日本』

とうじ

## 素材のキワを扱う杜氏のテクノロジー

中世の芸能者と職人は遊行する民だった。多様でたくさんの日本をつなぐマレビトなネットワークだった。中世ノマドたちは卓越した感性で時間と空間を編み変えていく。酒造りを担ってきた職人集団・杜氏も遊民の系譜に位置づけられる。

杜氏は酒造の全工程において極めて繊細なセンスと技能が求められる。経験と勘をたよりに、うつろう香味と風味、酵母菌や酵母といった微生物の動向を適切にキャッチし、そのキワを見定めながら銘柄の味に仕上げていく。勘を働かせるとは、すなわち「当てる」ということだ。「見当」という熟語があるように、「当」を見極めていく。

博物学者・南方熊楠は、直感的な中を「やりあて」と呼び、その方法によって数々の独創的な発見や発明を残した。熊楠が目指した見当の科学はまた、日本の職人の技能の中に生きている。



### 世界一統 大吟醸「熊楠」（和歌山県和歌山市）

世界一統は南方熊楠の父が創業した酒造会社。銘酒として名高い銘柄でもある。大隈重信が命名した。大吟醸「熊楠」は熊楠生誕120年を記念して発売された。

## 洋の用途に和のキワを。包丁デザインの現在



### 庖丁工房タダフサ パン切り包丁（新潟県三条市）

定番のパン切り包丁と異なり、先端だけが波刃に。抜群の切れ味で、切り口はなめらか。さらにパンくずがほとんど出ない。研ぎ直して使い続けることができるのも特徴。ものづくりと金物の町・燕三条でつくられている。

鋭さや手際の良さを評価するとき、「キレがいい」とか「キレがある」という。もともとは刃物の切っ先の鋭さをあらわす言葉だ。刃物鍛冶職人のキレとキワの熟知が、日本に豊かな包丁文化を生み出してきた。包丁は刺身包丁、出刃包丁、菜切り包丁と用途に合わせて多岐に特化し、包丁さばきも、みじん切り、イチヨウ切り、半月切り、小口切りと料理人の技とともにキレとキワが磨かれてきた。

日本の包丁は切れ味と切断面の美しさが長所の片刃が基本だ。一方、洋食とともに輸入されるようになった西洋のナイフは両刃構造になっている。両刃は切れ味は落ちるが長持ちする。近代以降、職人たちは和洋それぞれの美と用を併せ持った国産の洋包丁の開発に取り組んでいく。

吉田金属工業のGLOBALシリーズや庖丁工房タダフサは、包丁デザインの極みとして、世界中から注目されるようになった。



①



②

①福の神・エビスさんは、海に流されてやってきた異形の神。  
②日本の神様は神輿に乗って移動するのも特徴だ。③たまに帰ってきてはまた旅立ってしまうフーテンの寅さんは日本人の好きなマレビト・キャラクター。④ビリケンは意外にもアメリカ生まれ。いまや通天閣の神様として有名。⑤海からやってくるゴジラにも神性が宿っている。

## やってくる ストレンジャーが 日本の神様。



③

「俺は旅人だからな、  
風の吹くまま気の向くまま、  
歩きながら考えるさ」

『男はつらいよ』シリーズより

©松竹株式会社



④

写真：太田真三



⑤



## マレビトはゲストの神。 客神感覚は 主客を転換する作法を生み出した。

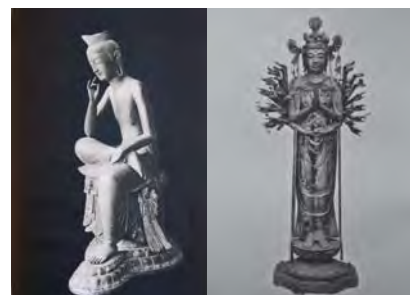
### 村や里に稀にやってくるストレンジャー

日本はマレビトの国である。マレビトは「稀なる人」のこと。「客神」「客人」とも綴る。村や里に稀にやってくるストレンジャーだ。民俗学者の折口信夫が命名した。折口は沖縄のノ口と呼ばれる巫女の儀式を目の当たりにして、日本の神の本来の姿を直感した。ノ口は海の彼方の理想郷ニライカナイから神を呼び寄せる。来訪神は常住しない。時折どこからかやってきて、どこかへと帰っていく「客なる神」だ。日本の神々は、ユダヤ教やキリスト教、イスラム教のように、いつも天に君臨する神とは異なる。欧米型一神教の神が主神なのに対して、多神多仏の日本において多くの神々はやはり客神。いわば、ゲストの神なのだ。

### ガイジンさんこそ日本を活性化するヒントを握っている

客神を迎える習俗はさまざまな日々の生活にもあらわれている。ゲストを招くための日本独特の作法や習慣の発達にもつながった。たとえば、お座敷ではゲストが上座に座る。ただし、主人と客人の位置関係はきちっと定まっているわけではない。シチュエーションに応じて、大事な客のために座布団を裏返して座を譲ることができる。寄席で落語家が交代するときに座布団をひっくり返す高座返しもその一例。大事な物もいったんは神棚に上げるが、その時々で入れ替えることができる。このように主と客が転換するのが客神感覚のポイントだ。

日本人が舶来品やガイジンさんをことのほか意識的に扱うのも社会文化の奥に「客なる神」という見方があるからだ。古代に仏像を大事にしたのも、近代にお雇い外国人を大事にしたのも、彼らをマレビト扱いしたからだった。現代においてもそれは変わらない。ドナルド・キーンや白鵬ら外国人たち、異装の美輪明宏やマツコ・デラックスといったストレンジャーやアウトサイダーこそが、日本を活性化するヒントを握っていることに、日本人はうすうす気がついているのである。



弥勒菩薩・千手観音

仏教はインドから中国、朝鮮半島を経て日本に渡来、聖徳太子の時代に広まった。菩薩も観音も客神なのだ。



お雇い外国人による建築：法務省旧本館  
ドイツ人建築家エンデとベックマンの設計。明治政府はマレビトである彼らに国家の中枢機関の建物を任せた。



提供：公益財団法人  
日本相撲協会

外国人力士

ブルガリア出身の元・琴欧洲（現・鳴戸親方）。いまや前頭以上の外国人力士の割合は4割にもなる。



©諫山創／  
講談社

マンガ『進撃の巨人』（諫山創）

テレビアニメ化、実写映画化もされたヒットマンガ。巨人＝マレビトの物語と読める。

いつの日か日本へ行かれるのなら、  
是非一度は縁日へ足を運ばれるとよい。  
縁日は夜見るに限る。無数のランプや提灯の光のもと、  
ものみなこの上なく素晴らしくみえる。 —小泉八雲『日本の心』

## 芸能の本質を告知するマレビトの舞い

折口信夫は、マレビトの芸能として、長野県の新野の雪祭りを取り上げている。「ランジョウ、ランジョウ」という掛け声の中、五穀豊穡をもたらす幸法（さいほう）、茂登喜（もどき）、競馬（きょうまん）といった仮面の神々が次々と登場する。

客神たちは、真冬の深夜から早朝にかけて舞い続け、「おとづれ」の気配を残してまたどこかへ去っていく。目尻の下がった穏やかな表情の幸法に対して、茂登喜は目と眉が吊り上がっていて、怖い面をつけている。茂登喜とは「擬き」のことだ。模倣すること、何かを真似ることをいう。折口は、このようなモドキの芸能には、「代わって再説する」という役割があると見た。また、世阿弥が芸能の本質を物学（ものまね）にあるとみなしたのは、そこにモドキを投影したかったからだった。



新野（にいの）の雪祭り（長野県阿南町）

提供：南信州広域連合

古代芸能のルーツとされる長野県の祭り。1月14日の夜から翌朝にかけて伊豆神社境内で執り行われる。折口信夫は「日本の芸能を学ぶものは、一度見る必要のある祭り」と紹介した。



提供：株式会社テレノイドケア

## おとづれを感じる モドキの装置

ロボット開発者の石黒浩（大阪大学）が開発したテレノイドは一見不気味な姿をしている。一目で人間を想起させると同時にあきらかに異形でもある。まさしく異人の趣がある。はじめは誰もが「なんだこれは」と訝しがるのだが、たちまち好きになっていくのだという。男性なのか、女性なのか、子どもなのか、老人なのか、誰であるかわからないニュートラルなデザインは誰にでもなれるということだ。各人が思い思いのマレビトをテレノイドに乗り移らせることができる。おとづれを感じることができるわけだ。テレノイドはデザインがまことに絶妙だった。ロボットデザインはモドキの技量が試される。新野の雪祭りをはじめとするお祭りや能、文楽や歌舞伎といった伝統芸能の中にもイノベーションの鍵は潜んでいるのだろう。

### 遠隔操作型アンドロイド「テレノイド」（大阪大学 石黒浩教授）

国際電気通信基礎技術研究所（ATR）と大阪大学が開発した遠隔操作型アンドロイド。要介護高齢者の中でも特に認知症状が重度化した人の会話促進などコミュニケーションロボットとしての役割が期待されている。